

その他

私の軍隊生活体験

滋賀県 玉本健一

徴兵検査

私は昭和十三年徴集の甲種合格の現役兵で、昭和十三年の暮に朝鮮平壤の第二十師団歩兵第七十七連隊の補充隊（歩兵砲隊長坂口少佐）へ入隊しました。

―滋賀県出身の玉本さんが、なぜ平壤に入隊したんですか。

当時の朝鮮部隊は年度によって師団管区が異なり、昭和十三年度は京都師団管区、十二年度は名古屋、十一年度は福岡師団管区から兵隊を徴集するようになった

ていたんですよ。このことは、あまり知られていなかったと思う。従って二年兵は愛知、三年兵は九州福岡で、私等の一年あとから来た初年兵は大分出身といった具合で、関係者は全国にまたがっていましたね。

徴兵検査秘話とでもいうか、この話は誰にも話したことはありません。親にも子にも、祖父、祖母にも話したことはない、私の秘密です。

私は背があまり高い方ではなかった。むしろ当時の壮丁としては、背の低い方であったので検査に合格するよう願って「血書志願」することにしました。

家族のいない時間帯をねらって、包丁を神棚に供え、奉書を机の上に敷いて机に向かって静座し、おもむろに包丁を神棚から、おろしてきて、一気に右手の人差指の先を切った。血が吹き出た。そして血が、したた

り落ちた。私は右手で一氣に志願書を書きました。

「私は一死報国の志に燃えているから、是非、甲種合格に採用してほしい。血書して志願します。」

玉 本 健 一

これだけの文字を奉書に血で書くのだが、奉書が血を吸い込むのはげしいので血が足りなくなりました。然し一度傷をつけた指先へ再び包丁を入れることは痛くてできたものではない。私は人差指の先程とは少し違うところに包丁を入れて血を出し志願書を書き上げました。そのためビッショリ汗をかいていました。指の傷に脱脂綿を当てて包帯し徴兵検査に臨んだ。検査の前に、その血書を徴兵検査官に差し出したことは、いうまでもありません。

この血書が本当か、うそか、ずいぶん詳しく検査されたあと医務室で立派な包帯をしてくれましたね。結果は無論「甲種合格」でした。そして検査官の講評にも「今日は大変に嬉しいことがある」と前置きして発表されたのです。現在の私なら、とても出来ないことであり、もし、このことを親が知ったら何とといった

だろうかと思うと心が乱れます。

— 当時の軍国美談になりましたね。

入 営

昭和十三年の暮に神戸港の埠頭に「集合せよ」という命令がきました。神戸港の埠頭へ行ったら、玉本健一は中隊長をやれということです。仕事は毎晩午後八時になったら隊員を一カ所に集めて人員を点呼せよ。異常があつたら〇〇へ報告せよ！この二点でした。

それきり初年兵受領役の下士官の姿は見えなくなつた（恐らく国元へ帰っていたのだろう）。私は皆を集めて、三個小隊に分け、それぞれ小隊長を決めて、小隊長の位置を明示し、集合場所と時間を指定して中隊の編成を終わつた。三日程たつて、いよいよ乗船の日がきた。船に乗つた。船倉はガランとしていて馬くさい輸送船でした。乗つたトタンに今までの小隊長も中隊長も、くそもあつたものじゃない。全く無差別にビンタが飛んだ。「いよいよこれから軍隊だ」と覚悟をきめるに充分なビンタだつたね。

女界灘を渡り、朝鮮釜山の岸壁に静かに船が着き、

列車に乗り換えた。この辺りは学校の修学旅行で一度来ているので別段これといった感激はありませんでしたが、列車が途中の駅へ入るたびに機関車についている鐘が「ゴーン、ゴーン」と鳴るので、いかにもこの音が物悲しく耳に響いて暗い気持ちになりました。

この先どうなっていくのだろうか。考えても仕方のないことを考えるようになり、とうとう一睡もしないまま平壤駅に到着しました。

零下二六度と聞いていたが、さすがに寒い、降る雪も全くしめり気がなく積もらないで、こびりついているという感じです。寒いというより痛い。雪中に舞い上がり吹きだまりで根雪になる。こんな所で何年暮らすのだろうか。考えただけでも、いやになる。

兵器のすれ合う音、軍馬のいななきとにおい、実に殺伐たるものばかりで、気がおかしくなりそうになる。軍服に着換え終わって班長、助手、教官それぞれ紹介された。ベットに入ってから銃架に銃が冷たく並んでいるのを見て、ポロポロッと涙が出たのを今でも覚えています。寝るのも、こんな殺風景の中で寝にやなら

んのかと思うと独りでに泣けてきたんですね。当時は全く感じ易い、か弱い一個の青年だったんですね。

演習、分解搬送

―玉本さんは歩兵砲隊のうち何砲ですか。

歩兵砲といってもいろいろありましてね、連隊砲、大隊砲、速射砲とあります。私は速射砲であって、戦車の鉄板を貫通するだけの威力を持った最新兵器です。ソ連の戦車を一、二〇〇メートルの距離から発射して貫通出来るだけの威力を持っていたのですが、ノモンハン事変で鹵獲した戦車を試射してみると驚いたことに八〇〇メートルまで接近しないと貫通しないことが判った。しかも敵はどんどん改良を行い、今では、もっと近づいて射たないと貫通しないことが判つてきました。

滅多に戦車の出でこない中国の戦線では専らトーチカの銃眼射撃に威力を発揮したらしく（その場合は榴弾を使用した）命中率が良いのと徹甲弾であるため命中後の効率が良いことから重宝がられました。

我々の演習は対ソ戦を想定して、あくまで対戦車砲

としての訓練でした（トーチカの銃眼射撃などは朝飯前）。しかし、火を吹く敵のトーチカ陣地の重機を一時のうちに沈黙させる等、胸のすくような快挙は速射砲の威力に期待するよりほかに方法がなかった。ただ惜しむらくは砲の数が少ないことでした（甲装備の一個連隊に僅か四門しかない）。

演習は思い出すだけで鳥肌の立つような烈しいもので、相手が戦車だけに常に機敏な動作が要求され、砲を分解して砲身と車輪と防盾と脚と弾薬に分けて、路なき路を過ぎ、山を登る時などは目から火が出る思いをしましたよ。馬の力を利用できない時の苦痛は言語に絶するものがありました。

士官学校あれこれ

予備士官学校（豊橋）での訓練は原隊における訓練よりも烈しく苦しかった。のべつまくなしに演習が行われるので、息を抜くひまが無い。大休止のない行軍のようなものでありましたね。

ある日、非常呼集で起こされ、三十分後には駈け足出発ですから馬糧の準備、飯盒の準備、馬を から出

して砲につなぐにしても余程機敏に動作しなければ間に合わない。ノコノコ歩いていたのでは落第で、すべて駈歩です。朝、校門を出たら帰るまで走り続ける。

教官は最後の一人になるまで走り続ける予定だったようでした。午前中、走り続けて午後三時頃からバタバタ倒れ出した。私も倒れた。倒れる前、農家の軒下に乾かしてある赤唐辛子に、むしゃぶりついたが辛くもなんともなかった。どのようにして帰校したのか全然記憶にない。このような訓練に耐えられたのも全員が同じ生徒であるという連帯感と気安さがあったからだと思いますね。

卒業、任官、動員、召集解除

昭和十五年六月二十七日、豊橋陸軍予備士官学校を無事卒業しました。第三期生です。卒業する姿がまたふるっている。入校する時の服装と卒業する時の服装がチャンポンなのです。牛蒡剣を腰にしなから指揮刀を吊り、そして三八銃を肩に、といった姿でした。

昭和十五年十一月一日任官

昭和十六年七月七日関特演（関東軍特別大演習）と

いう名の動員が下令され、軍帽を戦闘帽に、指揮刀を軍刀に替え、営外居住が営内居住になり、物々しい雰囲気の中に、いつしか歳月が過ぎて部隊号も朝鮮平壤歩兵第四十四部隊と替わった。一番最初にもらった命令は「北鮮のボス、金○○を捕らえろ」だった。

その時の私の隊長は中島中尉だったが、たまたま中尉が週番司令だったので、代りに私が討伐隊長になり「金○○」を探しに出かけた。しかし民衆が「金○○」の味方であり、かくまうので情報は入らず、とても捕らえることなど出来なかった。ある部落に入り馬に水をやろうと休憩したところ井戸の「つるべ」が取り外してあったり、かくしてあったりで馬に水をやることが出来なかった。

また、ある冬の頃、路傍で休憩したところ全員が疲労のため眠りこみ、歩哨まで寝込んでしまい、砲と馬の姿がスッポリ雪をかぶり、兵は皆雪の下で凍死寸前のところ、私に気が付き全員を叩き起こしてことなきを得たが危ない一瞬でした。そのほか思い出話は山程ありますが割愛します。

そして私は昭和十七年十月末、召集を解除され帰郷しました。

―終戦の年は、どこにおられましたか。

第二回目の召集、捷号作戦、終戦

昭和二十年四月、捷号作戦で召集され、敦賀の歩兵連隊へ入隊し、同日付で第五百五十三師団（護京師団）（宇治山田）の速射砲隊（渥美半島）に配属され、渥美半島に速射砲陣地を構築することになりました。五十年前の渥美半島は福江までは貨車輸送できたが、その先は徒歩で保美という丘陵地帯に陣地を作りました。歩兵一個中隊が護衛に来てくれましたが、隊長の顔を見てビックリしました。学友それも同級生の藤井中尉でした。再会を喜び合い健闘を誓いました。

最初は民家に分宿していたが、陣地の構築がはかどらないので陣地のそばに藁の家を建て、昼夜交替で急いだ結果、七月に陣地が完成しました。その頃はB29の爆撃も日増しに烈しくなり、名古屋が空襲されているのが陣地からよく望見されました。

私の隊には古年次兵（十二年兵）と学徒動員のまだ

子供々々した兵がいました。陣地が完成したのを祝って一泊の外泊を与えようとしたが若い兵は外泊は欲しくない。つまり帰りたくない。その代りに音楽のレコードと蓄音機を買って欲しいと言うのです。そんな物がこの近くにある筈ない。名古屋も爆撃で焼野原になり今時レコードなど扱う店があるか、ないか判然としない状況で、その間アツという間に一ヵ月たち終戦を迎えてしまった。学徒動員の兵には申し訳ないが私は今もそれを忘れることが出来ない。

当時、子供々々していた兵も今や六十歳を過ぎ、第二の人生に足を踏み入れていることであろう。達者で暮らせ！そのみを祈っています。約束を果たせなかった悔恨、今となっては謝るほかない、許してくれ。

渥美半島は伊勢湾に突出した半島であって、知多半島と並んで伊勢湾口を押さえるのが主眼で、伊良湖岬の突端は師団司令部のある宇治山田と指呼の間にある。

ある日、師団司令部から参謀が陣地を視察に来たが、その時の参謀の言葉は、「どうせ貴官等は助からぬ。

前も海、後も海だから逃げようがない。火焰放射器の火焰が届かないような陣地を作れ。そして敵が上陸して来たら陣地の中へ逃げ込め！」

そんなことを言つて帰つて行つた。兵には黙つていたが私はその積りで陣地を構築した。敵が上陸する前に終戦を迎えたから良かったようなものの、敵が上陸して来たら恐らく火焰放射器の前に全滅していたであろう。

陣地構築を急ぐあまり兵の訓練には手が廻らなかつた。一度実弾射撃をやってみようということになつたが、私も兵も四七ミリ砲の実弾射撃の経験が無い。三七ミリ砲と構造は余り変わっていない筈だが何といても最新兵器だけに不安がある。十二年兵をさそつてみたが皆恐れをなして、我こそはと出る者がいない。

師団長閣下も来場されて、発射今や遅しと待ちかまえていられる。止むを得ず意を決した私が手本を示さんと、照準器に手をかけた瞬間「待つた！」がかかった。各隊は急ぎ宿営に帰り玉音放送を承るべしとの命令でした。砲をその場に残置し（若干の護衛を付けて）

急ぎ宿営に帰って玉音を聞きました。それが終戦の詔勅だったのです。

砲は海に捨てよとの命により、海に突き出た棧橋を作り海に捨てる計画だったが、その寸前になって「待った」がかり、砲は完全な姿で米軍に引き渡すことになりました。

兵員の武装解除は兵器を返納しただけで何もなかったですね。拳銃は官給、私物を問わず返納したが軍刀については何の指示もなかったため、そのまま持ち帰りました。兵は毛布を持てるだけ持って帰郷した。全般的に渥美半島方面の武装解除は寛大であったようですね。

これからどうなるのだろうかという質問を投げかけてみたら皆「判らん」ということでした。民主主義の国になるんだと言ったので民主主義とは一体何なのだと聞えば「国民主体の政治が行われるのさ」という返事でした。

民主主義は金と時間がかかるという話も出ましたね。国民主体なら大部分の国民が戦争しようと言え

戦争をするのか、と反問したが答えは返って来ませんでしたね。

幸運の武兵団第九師団（沖縄、台湾）

湾

石川県 蕪城 直勝

―第九師団は、満州、沖縄、台湾と転戦し、結果的には幸運無傷の兵団といわれますが、蕪城さんには何年徴集ですか。

私は大正九年生れ、昭和十五年徴集兵、同十六年一月現役兵として、敦賀の歩兵第十九連隊補充隊へ入営です。一週間で満州でしたが、南方はおろか、台湾、本土も危ないというので、在満の主力師団は続々と南下していったのです。

しかし、満州での厳しい訓練は忘れることが出来ません。ご承知のように、第九師団（武兵団）は、金沢の歩兵第七連隊、私の入った敦賀の第十九連隊、富山